

## 「特集 国境くにかいの歴史文化」にあたって

今年度から文学部日本文化学科の教員で共同研究を開始した。そのテーマを「国境（くにざかい）の歴史文化」とした。幸いなことにこの共同研究に対して学長特別教員研究費の交付を受けることができた。この紀要はその成果の一部である。

国境の歴史文化は、多面的・多層的でありかつ豊饒で創造性に満ちている。多文化の接触は時に軋轢や紛争を醸し出しつつ、固定性や閉鎖性から免れた地域空間は、時代変化の前線として歴史の表舞台に立つこともある。そこでは、外部から降って湧いたような影響を受けることもあるが、価値観と意志ある生活者の地域づくりが意識される時、新時代の個性的な歴史文化を生むほどの活力が引き出される可能性をもつであろう。そのことを歴史の中に探り、現状の中に見出し、今後の展望に生かしたい。共同研究のテーマは、このような考えに立っている。

国境も歴史文化もさまざまな次元で存在する。日本文化学科の教員が、専門分野で日々とり組んでいる研究を持ち寄り、新たな視点で総合し、自らの研究の意味を考え直す。そのような知的作業の繰り返しは、「国境の歴史文化」の研究に稔りをもたらすのではないか。人類の将来を展望するために、地球規模で、また広狭の重層的な地域社会において、「国境の歴史文化」について研究されるべき課題は多いであろう。しかも地域の知的拠点たるべき愛知県立大学にとって、その立地の歴史文化上の意味を探究し認識することは、将来展望を確かなものとする糧となるにちがいない。

---

本号は、共同研究にとって最初の中間報告である。蓄積しつつある研究成果の本格的な集成は、すでに計画を実践に移しつつある。愛知県立大学は二〇〇九年度より発展的な改組で前進するが、文学部日本文化学科は日本文化学部歴史文化学科として再スタートを切る。学科・学部間や大学間の連携が一層模索され、さらには地域社会との交流も期待される。この継続的な共同研究が、それらの一環として推進されるよう、構成員の努力の一方で、有縁の方々からのご協力も仰ぎたい。とりあえずは、本号の内容がきびしく検討されることを願っている。

文学部日本文化学科教員一同